

---

# 魔法少女リリカルなのはStrikerS 一途な思い

czhs

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのはStrikers 一途な思い

### 【Nコード】

N0251Z

### 【作者名】

czhs

### 【あらすじ】

八神はやてが率いる新部隊その名を機動六課。この出来て二日目の部隊に異動してくる一人の魔導士がいた。これは機動六課と一人の魔導士が織り成す物語。

## 始まり（前書き）

初めまして『c z h s』と申します。ド素人なので温かい目で見てください。ありがとうございます。

## 始まり

はやて side

はやてとリインはある書類を見ていた。

「まさかあの人が来てくれるとは思ってなかったわ〜リンディさんに頼み込んだかいがあったちゅうもんや!」

「誰なんですかその人って?」

「うちやなのはちゃんそれにフェイトちゃんが前からお世話になつとる人や。ここ最近おうてへんから会うのが楽しみやわ〜」

二人が話してしるとドアをノックし二人の人物が部屋に入ってきた。

「はやてちゃん急に呼び出しなんて何かあったの?」

はやてに話しかける人物、栗色の髪をサイドポニーにして教導管の制服に身を包む管理局のエースオブエース、高町なのはだ。

「実はな今日他のところから異動してくる人がおるんよ。二人も知つとる人やから教えとこうと思つてな」

「私達も知つてる人?」

はやての言葉に首を傾げる金髪の女性。黒い執務管の制服に身を包んだフェイト・T・ハラウオンだ。

「せや、これがその人に関する書類や」

二人は書類を見ると同時に驚きと嬉しさのあまり声をあげた。

「えええええ!!!優君が来るの!?!」

「優が一緒ってことは…四人揃うのは三年ぶりだね」

「そうなんよ、はあくはやく来てくれへんかな」

優side

「ここが機動六課か…金使い過ぎだろ」

『まあ新築ですらね。それよりマスターあまり時間がありませんよ』

「そうだなありがとなアイリス」

『どういたしまして』

俺こと如月優と相棒のアイリスは六課の校舎前にいた。三日前にリンデイさんにいきなり異動させられたのだ。それも拒否権なしにな「アイツらと再び会うことになるなんてな…これもリンデイさんの策略かなんかなのか？」

『策略かどうかはわかりませんが少なくともあの人に限って悪意があつてやった事ではないと思います』

「そうだな…さてと行くか」

next

## 出向（前書き）

一話目です。やっぱり小説書くのって難しいですね……

## 出向

優side

「中に入った方がいいが部隊長室ってどこだ？」

『私に聞かれましても…』

「だよな」

こんな感じで俺達は六課の校舎内をさ迷っていた。受付の人が居なかったからまあしかたがないと思い自力で探していたんだが、一向に見つからない

「それに誰にも会わないとは…」

溜め息をついていると前から青髪とオレンジ髪の子達が歩いてきた。ちようどいいから聞いてみるか

「ちよつといいかい？」

「はい、何でしょうか？」

青髪の方が聞てくる

「部隊長室がどこにあるか教えてくれないか？」

「失礼ですが、どちら様ですか？」

今度はオレンジ髪の方が聞いてくる

「おっと名乗ってなかったな。俺は如月優一等空尉、本日から機動六課に異動して来た者だ」

「！？失礼いたしました。ティアナ＝ランスター＝二等陸士です」

「スバル＝ナカジマ＝二等陸士です」

「よろしくなティアナ、スバル」

「はい、では案内させて頂きます」

三人は部隊長室に向かった

はやてside

「優君と直接会うのは二年ぶりやな。今度どっかに連れてってもらおうかな」

「だめだよはやてちゃん、連れてってもらうのは私なんだから！」

「二人共、何言ってるの？優は私と出かけるんだよ！」  
そんな事を言っているとティアナから通信がはいつた。

失礼します、如月一等空尉をお連れしました

「わかった、ありがとな」

いえ、それでは

通信が切れるとドアをノックして優君が入ってきた

「失礼します、本日より機動六課に出向します如月優一等空尉です。  
一年間よろしくお願いします」

「機動六課部隊長の八神はやてです。六課はあなたを歓迎します。」

お互い敬礼し握手をする

「さて、堅苦しいのはしまいや。久しぶりやね優君」



「これからよろしくね優君」

「よろしく優」

「久しぶりだなはやて、なのは、フェイト!」

n e x t

## 思い（前書き）

三話目です。そういえば主人公の容姿について書いてなかったよ  
うな……

## 思い

優達は軽く挨拶をした後、今後の事について話し合っていた。

「俺は何をすればいいんだ？」

「優君にはなのはちゃんとフェイトちゃんの補佐役かつ六課の副部隊長をしてもらうつもりや」

「つまり三人の付き人ってことなるのか？」

「まあそんな感じじゃ！」

話を聞き終わると優は少し俯き考えこんでいた。

地上本部からの呼び出しもあるからな…どうしよう…

その姿を見てなのはは恐る恐る尋ねた

「優君、私達と一緒にじゃいや？」

聞いてくるなのはの方を見ると少し目を潤ませ上目遣いでいた。よく見ればフェイトとはやても同じようにしている

「いやな訳ないだろ！ただ地上本部からも呼び出しがあるから四六時中一緒にはいられないぞ」

それを聞くと三人の顔がいつきに明るくなった。

「もちろんそのつもりや。仕事内容は個別に聞いてな「了解」じゃあ六課全員をホールに集めとるから挨拶しに行こか！」

「その前一つだけ言わせてくれ。三人とも…無理はするなよ」

「優（君）……」

「まあそれだけだ。はやくしないと置いてくぞ？」

「あ、うんって待ってよ優君」

四人は部隊長室をあとにする

(マスター…あの事言わなくて良かったんですか?)

(無駄な心配をかけたくないからな…それにできるならこの事は知られないほうがいい。俺にとってもあいつらにとってもな)

俺がやる事は一つ、あいつらを守る…ただそれだけだ……

n e x t

## 模擬戦 前（前書き）

四話目です。

とりあえずあと一話かいたら主人公設定を書きたいと思います。

## 模擬戦 前

俺は今柱の後ろに隠れている。何故かというとはやてに隠れてると言われたからだ。本人曰く皆を驚かせたいらしい

「皆忙しい中集まってくれてありがとな。集まってもらったんは今日から六課に出向する人を紹介するためや。それじゃ優君おねがい」

言われて出てみるとロングアーチ陣が「えええええ！？」と言いたそうな表情をしている。スバルとティアナは一度会っているからかそれほど驚いていない

「わざわざ集まって頂きありがとうございます。今日から機動六課に出向となりました、如月優一等空尉です。立場は副部隊長となりますが気軽に接して下さい。一年間よろしくお願いします」

「あの如月さんってもしかしてあの有名な『銀髪の断罪者』さんなんですか？」

リインが質問した瞬間、優の放つ空気が変わった。殺気を放つようにして…

「そう呼ばれることもあるができるだけその名で呼ばないでくれ…」

静まりかえる部屋内。その沈黙を破ったのは部隊長であるはやてだった

「ま、まあとりあえず自己紹介はこれぐらいにして、各自仕事に戻るか!」

優side

はあくやっちまったな〜無意識だったとはいえ初見であればいいよな〜これからどうしよう……

そんな事を考えているとなのはとフェイトが話しかけてきた。多分さっきの事についてだろう。

「優君さっきはどうしたの?いつもの優君らしくなかったよ?」

「悪い、無意識のうちにあんな事になってた。ほんとにらしくないよな……」

「抱え込んだじゃだめだよ?何か悩み事があるならいつでも相談にのるから!」

「ああ、ありがとな二人とも。だけど大丈夫だよ」

「「うう／＼」」

そう言つて二人の頭を撫でる。二人共、顔を少し紅く染め恥ずかしそうに俯く。ちなみに頭を撫でるのは昔からの癖だ。

「さてとそろそろフォワード陣の訓練の時間だ、はやく行かないとな!」

「「うん!」」

そうやって三人は訓練所に向かった。優にこの後降りかかる不幸のことなんて知るはずもなく……

n  
e  
x  
t



模擬戦 後（前書き）

五話目です。戦闘シーン…難しいです。

## 模擬戦 後

優side

今、俺達の前にはフォワード陣がきれいに整列している。ちなみにフェイトは執務官の仕事が急に入ったらしく途中で別れた

「じゃあ、早速訓練始めようかって言いたいところなんだけど今日は模擬戦の観戦をします。ということで優君お願いね」

はい！？そんなこと聞いてないぞ！っ！かなんでフォワード陣はいかにも「楽しみにしてます」的な視線で俺を見てんだ！

(マスターやるしかないですよ。それにあれを使わない程度なら問題ないと思いますが)

(…そうだな…：まったく先に言ってくれよ…)

「はあ…で、相手は誰なんだ？」

「私だ！」

出てきたのはバトルマン…：もといシグナムだった。目を輝かせながら、その右手にはレヴァンティンが握らていた。

「まったく相変わらずだな、シグナム…：その癖はどうにかならないのか？」

「その癖とはなんだ？それよりも早くはじめるぞ！」

そんな訳で俺とシグナムは空中にいる。もちろんバリアジャケット

を着ている。

「ルールは戦闘不能か降参させた方の勝ちだよ。二人共、準備はいい？」

「「おう（大丈夫だ）」」

「じゃあ始めるね、レディーゴー！！」

合図がかかると同時にシグナムが斬りかかって来た。それを魔力で作られた双剣で受け止め、激しい打ち合いをはじめた。

side out

ティアナside

いま私の上空では二人が打ち合っている。シグナム副隊長も強いけど如月さんも強い。しかしあの人はデバイスを持たずにどうやって戦っているんだろう

「なのはさん、如月さんはデバイスを使わないんですか？それ以前のあの人はどうやって戦っているんですか？」

「優君は昔から魔力の使い方が上手でね、あれは自分の魔力を双剣の形にしているんだよ。だから基本的にはデバイスは使わないんだ」「そうなんですか…」

（やっぱり凡人は私だけか…）

side out

空中では両者共に一步も譲らない戦いが繰り広げられていた。斬り、防ぎ、回避し、また斬る。何度もこの動作が繰り返されていた。

これじゃきりがないな…

一発かましてやるか！

優は一旦距離をとり双剣をブーメランのように投げつけた。その左右から襲ってくる双剣を落としたシグナム、しかし彼女の視界に優は居なかった

「おらあああ!!」

「くっ!」

そんなシグナムの上には魔力でできた巨大な剣を振り下ろしながら突っ込んできた優がいた。とっさにレヴァンティンで防ぐシグナムだが勢いを殺しきれず地面にたたきつけられてしまう。だがすぐに体勢を立て直すシグナムに地面に降りた優は少し驚きの表情を見せた

「まさか今のを防がれるとはな…だが次で決めさせてもらおう」

「甘く見てもらっては困るな。いいだろう、受けてたとう!」優は左手に魔力でできた日本刀を持ち居合いの体勢をとる。シグナムもカートリッジをロードしレヴァンティンを構える

「紫電……」

「無限……」

—————

「一線!……」

「乱線!……」

両者が斬り合い沈黙が訪れた。いまだに双方共動かない。なのは達はどうなった分からずただ待っていた。そんな中…

「流石だな…如月…」

そう言っつてシグナムは倒れる。優は慌てて近寄るがシグナムの意識

がはっきりしている事を知り胸を撫で下ろす

『シグナムさん戦闘不能、よって勝者優君!』

n e x t

## オリ主設定（前書き）

オリ主紹介です。短いのでできればもう一話投稿します

## オリ主設定

名前：如月 優きんづき ゆう

歳：二十歳（なのは達と同級生）

身長：180？

体重：75？

髪：銀髪の短髪

階級：一等空尉

魔力：A+

魔力光：淡緑色

レアスキル：なし

バリアジャケット：白色のズボンに黒のTシャツ、黒のコートを羽織る。

なのは達とは小学校六年生の時に転入生として出会った。過去の話は後ほど…

無限乱線むげんらんせん

- ・ 魔力でできた日本刀を居合いの姿勢で構え、振り抜くと同時に魔力を一気に放つことで無数の斬撃をくり出す。
- ・ 魔力を多くすることで斬撃の数が増える。

デバイス：アイリス

インテリデバイス

待機状態：ブレスレット

戦闘時：変化なし（のちのちは…）

機能：おもに魔力の制御・演算

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0251z/>

---

魔法少女リリカルなのはStrikerS 一途な思い

2011年12月11日10時52分発行